

2023 年度 事業報告書

特定非営利活動法人 ゴールドリボン・ネットワーク

1 事業の成果

2008年に設立した当法人は、2023年6月に15周年を迎えた。10月には活動の歩みを記載したゴールドリボン通信の「15周年記念号」を制作し、各活動がどのような目的で始まったか、また、それら活動の成果等を支援していただいている企業や個人の方、さらには関係者の方々にお知らせすることができた。お陰様で、この15年間で我々の活動を理解し支援いただいた方々は大きく広がった。2023年度も小児がんの子どもたちとご家族に寄り添いながら活動を継続・拡大した年であった。

数年にわたり自粛を強いられていた新型コロナウイルス感染症も5月8日より「5類感染症」の分類となり、徐々に社会の動きも活発化した年であった。前年と比較してもイベントの機会は増え、小児がんの子どもたちと家族への支援を強化のためにファンレイジングの強化にも努めた。

その中で奨学生の採用数20名の継続や、昨年、試験的に開始した「ひとり親世帯支援制度」を本格展開することができた。また、東京マラソン・大阪マラソンのチャリティ団体に選出されたことで、多数の国内外のチャリティランナーからの支援を受けることができた。

【1】 収入

2023年度予算13,520万円に対し収入実績は16,328万円で120.7%の結果となった。特に東京マラソンによる寄付（約3,500万円）が増加した点が貢献している。（2022年度比+1,000万円）

また、会員寄付についてはHP、SNS等の継続的な情報発信をしたこともあり、2023年度収入は個人が約1,773万円、法人が約1,416万円で会員寄付合計は対前年比108.7%となった。

今後も安定的な収入確保のためには、マンスリーサポーター（毎月の寄付）の増加が重要であることから、マンスリーサポーターの加入を呼びかけるチラシをイベント等（外部団体によるチャリティイベントを含む）で配布し、その普及を継続的に行った。結果、2023年末は347人（2022年末230人）に増加したが、さらなる強化が今後必要と考えており、なお一層取り組みを強化していく。

会員以外の一般寄付については13,051万円で収入の79.9%を占めており（対前年81.9%）、活動の柱となっている。当法人の活動を理解いただくための広報をさらに強化していく。

助成金については、2023年度事業を対象とするもの（2022年度中に採択・入金されたものを含む）は2件、約50万円を受けることができた（内訳：ニット帽・マスク15万円、奨学生交流会35万円）。

物品助成（提供）については、絵本360冊、児童書40冊、コスメギフト詰め合わせ150セットの提供を受け、それぞれをひとり親世帯の患児および経験者・きょうだい児・家族へ提供した。

本年よりひとり親支援を本格的に開始し強化したが（【2】－②のとおり）、この本やコスメの提供によりさらに充実した支援をすることができた。

支援自動販売機は、新型コロナウイルス 5 類移行によりオフィスに人が戻りつつあることもあり、販売は増加傾向で 2023 年度は 548 万円（前年比 112.5%）となった。また、自販機設置台数については飲料各社が設置台数目標から 1 台当たりの採算重視の方針に変わったこともあり、新規設置の依頼があっても採算が見込めず設置に至らないケースが 13 件あった。その影響により新規設置台数は 22 台（前年比 84.6%）に留まった。なお、撤去は 20 台（前年比 90.9%）で最終的な稼働増は 2 台という結果となった。

古本募金は、買い取り業者であるバリューブックスによって 3 月と 6 月に 500 円、9 月に 700 円、10 月に 500 円の寄付金上乘せキャンペーンがあり、12 月には査定額 20%アップキャンペーンが行われた。全体の件数は 129 件で 2022 年度より 33 件減少したが、金額は約 38 万円で前年より約 6 万円増収となった。（2021 年度比では 21 件減少で約 8 万円の増収）

古物取引業者との提携により古物の買取金を当法人への寄付とする「お宝エイド」では 2023 年度の実績は約 12.7 万円で、2022 年より 78 件、約 40 万円の減額という結果となり、古本募金と共に広報強化の必要性を強く感じた。（2022 年 3 月から入金開始のため、2021 年度比はなし）

2023 年は遺贈による寄付は 4 件で 205 万円であった。遺贈寄付についてはより多くの方々へ周知することが重要であるため、チラシの見直しを行い今後も継続して案内をしていく。

【2】 小児がん患児・経験者の QOL（生活の質）向上のための支援

① 交通費等補助制度

2023 年 5 月に新型コロナウイルス感染症の位置付けが第 5 類へ移行したことで、感染症対策のため公共交通機関の利用を控える必要は少なくなったが、自己負担による PCR 検査や面会人数、面会時間の制限などは現在も続いており、小児がん治療中の患児家族を取り巻く環境は依然として厳しいものがある。助成件数については、2021 年（191 件、2,672 万円）をピークに、2022 年（178 件 2,501 万円）、2023 年（166 件 2,524 万円）と減少傾向にはあるが、平均助成金額は 2021 年 139,908 円、2022 年 140,510 円、2023 年は 152,078 円と増加している。

昨年の諸物価の高騰の中でガソリン代の負担が大きくなっている。そこでガソリン代の助成金額について 12 月より助成額を引き上げ、患児家族の交通費の負担軽減を行った。ガソリン代の補助については引き続きガソリン価格の動向を捉え必要に応じて調整を図っていく。

② ひとり親世帯支援制度

入院治療が必要となった小児がん患児を抱えるひとり親世帯は親が、仕事を辞めたり休んだりすることで収入が減少する一方、入院時に諸費用がかかるため、その支援策として 2022 年に「ひとり親世帯支

援制度」(5万円/件)を試験的に実施した。2022年に遺贈寄付(指定寄付)としていただいた資金を基に、2023年2月より年収500万円未満のひとり親世帯を対象に1件10万円を支給する支援を拡充した。結果、1月(5万円/件)に3件15万円、2～12月(10万円/件)に111件1,110万円となり、合計で114件1,125万円を支給した。

③ ゴールドリボン奨学金

小児がん患児や経験者は晩期合併症を抱えながら、自らの夢を叶えるべく大学等への進学を希望し、学ぶ意欲の高い子どもも多い。しかしながら、その中にはひとり親家庭など経済的問題から進学をあきらめざるを得ない子どももいる。また、晩期合併症の治療を継続している場合、医療費の補助が無くなる20歳以降の経済的負担に不安を抱え、進学を躊躇する子どもたちも存在する。この奨学金はこのような子どもたちへの大きな支えとなっている。2023年度の奨学金支給実績は、2023年春入学21名を新たに加え、奨学生は58名に支給総額2,160万円を支給した。

2024年度入学予定者の応募者数は42名。2023年度は東京マラソンにより大幅な収入増を実現できたため、2024年2025年度で各20名程度の奨学生を新規に採用できるよう2,500万円を新たに特定資産に積み立てた。また、2024年度の実績者を選考した結果、2023年度と同数の21名(4年制13名、2年制8名)の新奨学生を採用した。

④ 奨学生交流会

小児がん経験者の中には晩期合併症や再発による様々な困難を抱える経験者がいる。また、小児がんの経験者であるが故に困難、孤独を感じる学生や学生生活や就職活動の課題などについて身近に相談相手を見つけることが難しい学生も少なくない等の課題がある。これら課題の解決の一助となるべく、昨年度に引き続き奨学生交流会を実施した。今回も対面とオンラインのハイブリッド形式とし、対面で11名、オンラインで1名が参加し、同年代の小児がん経験者特有の悩みや、将来への夢や取組などについて4時間にわたって語り合い体験を共有した。また、小児がん経験者の先輩である医師と社員の3名が、座談会のファシリテーターとして参加した。

⑤ キャンプ助成

7団体を採用したものの、新型コロナウイルス感染症の影響により1団体が開催中止となった。助成した6団体を合計したキャンプの参加者は136名、うち患児42名、助成の合計は約121万円となった。

⑥ ニット帽・ニットマスクプレゼント

ニット帽は小児がん患児に元気を与えることにつながっている。実績も昨年の248枚を大きく上回る315枚を提供できた。なおマスクも530枚(2022年度446枚)と前年を上回った。このプレゼントは「デンソーはあとふる基金」15万円を原資として実施した。

⑦ サバイバーネットワーク

前述のとおり新型コロナウイルス感染症の位置付けが第5類へ移行後、全国各地で開催されるスポーツ観戦やコンサート(茨城ロボッツ(茨城)、柏レイソル(千葉)、日ハム(北海道)、管弦楽(兵庫)等)

に各企業のご協力で小児がん患児・経験者・きょうだい・家族を多数ご招待した。
また交通費やひとり親等の支援事業利用者やニット帽プレゼント申込者の登録により、
登録者は1,251名となり、前年から約300名増となった。

⑧ 支援活動についての広報

当法人の支援活動を広く知っていただくことが支援者や各支援事業の応募者増につながるということから、従来の医療機関や教育委員会の他に都道府県(東京都は市区町まで)にまで案内先を広げた。また、支援をいただいている方々に活動内容を知っていただくこと、さらには支援者を増やすという点から当法人の活動をHP、X(旧Twitter)、Instagram、facebookなどSNSで発信し事業内容の周知を図った。

【3】「小児がんを治る病気に」するための研究助成と留学生支援

「小児がんを治る病気に」という想いで行っている「治癒率向上」および「QOL向上」のための研究支援は、2023年度は応募件数31件(治癒率向上23件、QOL向上8件)となり、内23件(治癒率向上18件、QOL向上5件)が選考委員会で採択された。その助成金額は1,921万円。また、留学支援については東京小児がん研究グループ(TCCSG)で選考され推薦のあった白井了太医師(国立成育医療研究センター)のアメリカのUniversity of Colorado, School of Medicineへの留学を支援することとした。

【4】小児がんの情報提供と理解促進

① 「小児がん情報」制作支援

最新の小児がん情報として、世界的に評価の高いNCI(米国国立がん研究所)が作成しているPDQ(Physician Data Query)のがん情報データベースの中の小児がん情報の日本語訳を行っている「神戸医療産業都市推進機構」を支援し、その公開に協力した。なお、この情報は医師および一般向けに分かれており専門家からも高い評価を得ている。

② ウォーキングイベント

小児がん啓発イベントであるゴールドリボンウォーキングは、感染防止を行いつつ5月13日(土)に東京お台場で開催することができた。当日は生憎の不安定な空模様であったが、2,355名の来場者数であった。出発式では月本一郎委員長(東邦大学医学部名誉教授)からの小児がんの話と、小児がん経験者2名が体験スピーチを行うことで参加者の方々に小児がんを知っていただく機会とした。当法人は実行委員会メンバーとして参画すると共に特別協賛した。イベントからの寄付総額約250万円を2病院、29患者会等の合計31団体へ寄付を行った。

③ Gold Ribbon Month 2023(9月小児がん啓発月間オンラインイベント)

2021年から開始した世界小児がん啓発月間(9月)に合わせた啓発イベント「Gold Ribbon Month」を2023年度も実施した。イベントのテーマを「大切なもの」に沿った小児がん患児・経験者による作品や手記、小児がん経験者のインタビュー動画を制作しHPの「メタバース美術館」の中で公開した。

この中でインタビュー動画は単体で27万回視聴され、多くの方々へ小児がんを知る機会につながったと考える。加えて、特定非営利活動法人日本小児がん研究グループ（JCCG）が9月に実施したGlobal Gold September Campaignに賛同団体として参加した。

④ Amazon Goes Goldへの協力

Amazon社は、9月の小児がん啓発月間にあわせ「Amazon Goes Gold for Kids with Cancer」と題して、さまざまな取り組みを実施している。世界中のAmazon社員が一斉に取り組むボランティア活動で日本では6回目の開催となる。

今年は9月4日（月）に開催されたキックオフミーティングで日本のAmazon社員に向けて小児がん経験者が体験談を話し、小児がんの実情を学び関心を深める機会となった。また、Amazon社と共同でおもちゃの入ったガチャガチャマシンを6病院へ、子供向けの図鑑とレゴブロックを15病院へ寄贈し、治療のため入院をしている子どもたちの支援をすることができた。

2 事業の実施に関する事項

(1) 特定非営利活動に係る事業

(事業費の総費用【 155,202 】千円)

定款に記載された事業名	事業内容	日時	場所	従事者人数	受益対象者範囲	受益対象者人数	事業費(千円)
(1) 小児がん支援のためのゴールドリボン普及事業	<p>①提携商品を通じて一般の方々へゴールドリボンや当法人の活動の認知を高めると共に、支援自動販売機での普及活動を継続した。</p> <p>②東京・お台場で開催されたゴールドリボンウォーキングに実行委員会のメンバーとして参画すると共に、特別協賛し、ゴールドリボンと小児がん支援活動の普及を行った。</p> <p>③大阪マラソン(2月)・東京マラソン(3月)・東京レガシーハーフマラソン(10月)に寄付先団体として参加し、チャリティブース等での情報発信などの普及活動を行った。</p> <p>④外部団体が主催するイベント等で当法人の展示パネル等を掲示し小児がんの理解・支援の普及を行った。</p>	通年	全国	8名	一般市民	延べ270万人(自販機等提携商品の販売数を含む)	41,631
<p>(2) 小児がんの治癒率向上のための研究・開発者支援事業</p> <p>(3) 小児がん経験者の生活の質の向上のための研究者支援事業</p>	<p>①一般公募による応募31研究グループから、選考委員会により決定された23の研究グループへ助成を行った。</p> <p>②日本小児血液がん学会及び日本小児がん研究グループ(JCCG)等研究団体への助成を行った。</p> <p>③東京小児がん研究グループ(TCCSG)スカラーシップ委員会で選考された研究者1名の海外留学を助成した。</p>	通年	全国	3名	医師 研究者 研究機関	のべ25団体 150名	26,725

<p>(4) 小児がんに関する情報収集並びに情報提供事業</p>	<p>①公益財団法人神戸医療産業都市推進機構 医療イノベーション推進センター (TRI) との協働事業として、米国NCI作成のPDQの小児がん情報の日本語版作成を支援した。</p> <p>②9月の世界小児がん啓発月間に合わせたオンラインイベント「Gold Ribbon Month 2023」の中で、小児がん患者・経験者によるオンライン作品展を実施し、小児がん経験者による体験談のインタビュー動画を公開した。</p> <p>③2022年度活動報告書、ゴールドリボン通信22号(設立15周年記念号)を発行し、支援者、寄付者及び当法人の活動に関心のある個人・法人へ配布した。</p> <p>④当法人の活動報告や、小児がんに関する情報をホームページやSNSで情報発信した。</p>	<p>通年</p>	<p>インターネット</p>	<p>4名</p>	<p>一般市民、小児がん患者、経験者とその家族</p>	<p>25万人 (サイト閲覧者含む)</p>	<p>9,314</p>
<p>(5) 小児がんに関する国内外の専門家、団体、研究機関とのネットワーク構築事業)</p>	<p>①日本で小児がん治療・研究を専門とする、小児がん拠点病院、総合病院等の多くが参加する日本小児がん研究グループ(JCCG)の支援協議会にメンバーとして参加。</p> <p>②小児がん経験者の集まりであるサバイバーネットワークへの情報配信は、登録者が前年度より300名近く増えて1,251名となった(前年度942名)</p>	<p>通年</p>	<p>全国</p>	<p>4名</p>	<p>医師 研究者 研究機関 患者、経験者、家族</p>	<p>1500人</p>	<p>0</p>
<p>(6) 小児がんに関するシンポジウム・講演会事業</p>	<p>①当法人を支援する企業に招かれ、小児がんの現状及び当法人の活動について講演・対談等を行った。</p>	<p>通年</p>	<p>全国</p>	<p>2名</p>	<p>一般市民</p>	<p>3600人</p>	<p>0</p>

<p>(7) 小児がんの知識、理解の普及・啓発事業</p>	<p>①ゴールドリボンウオーキングを通して小児がん経験者の体験談を公表し、小児がんの理解と子ども達への支援の輪を広げた。</p> <p>②当法人が所在している東京都豊島区主催イベントに参加し小児がんに関する情報を発信した。</p>	<p>通年</p>	<p>全国</p>	<p>10名</p>	<p>一般市民</p>	<p>3500人</p>	<p>2,790</p>
<p>(8) 小児がんの子どもたち(患児、経験者及びその家族を含む)の生活の質向上のための支援事業</p>	<p>①奨学金については、全国の小児がん経験者の大学生への奨学金(予約採用型、給付型)を58名に給付し、2023年度からの新規受給者として新たに21名を決定した。</p> <p>②小児がん患児とその家族が治療のため遠隔地の病院へ行くための交通費・宿泊費等の支援をのべ166家族に行った。</p> <p>③2022年より試験運用していたひとり親世帯支援について本格運用を開始した。年収500万円未満のひとり親114世帯に、入院時一時金を支給した。</p> <p>④小児がん患児・経験者やその家族を支援する団体が実施するキャンプ、イベントへの支援は、7団体に対し支援をした。</p> <p>⑤小児がんの患児に向けて、ニット帽子とマスクを希望者にプレゼントし、結果ニット帽315件、マスク530枚を配布した。</p> <p>⑥株式会社メディカルノートと提携し、小児がん患児・家族のための無料オンライン医療相談事業を行った。</p>	<p>通年</p>	<p>全国</p>	<p>5名</p>	<p>小児がん患児、経験者とその家族</p>	<p>1000人</p>	<p>74,739</p>